パーソン

三才社長、きものデザイナー
斉藤上太郎さん

銀座から都会的きものを発信

オールドカーに乗るような感覚で

さいとう・じょうたろう
1969年京都生まれ。89年京都芸術短期大学卒、同年三才入社、90年専務、96年きもの作家としてデビュー、2002年から東京コレクションに参加、15年社長。

きものの染色加工をベースに斬新なスタイルを提案する三才。東京コレクションにも参加するデザイナーでもある、斉藤上太郎社長は4月に開業するギンザ・シックスに約230平方㍍の大型ショップを開設する。店舗を六本木から銀座に移すことで、現代的なきものスタイルをより強力に発信していく。

大人のモードを表現した〝お召し物〟

――銀座の新店について。

きものショップであることが基本ですが、西陣織のインテリアファブリックや、椅子の貼り生地、バッグ、ネクタイなど非呉服の関連雑貨も揃えます。銀座の真ん中で、200平方㍍以上のスペースですから、出入りしやすい店作りを工夫し、カフェも併設します。きものを見られるカフェですね。少しでもきものに関心を持っていただこうというのも狙いです。従来の呉服店というよりもアーティストとしてのショップですね。エントランスには木象嵌を施し、カーペットには木を埋め込んで、天井は西陣織を貼り、ショールームとしての機能も備えます。六本木店（2月に閉店）の3倍近い広さです。

――店の発信のポイントは。

銀座の街は、来街者の年齢幅も広く、日本を代表し、世界に通用する街でもあります。きものであれば、どちらかというと内需向けではあるのですが、伝統的な和のものをそのまま出すのではなく、新しい価値観と美意識に照らし合わせて新しい提案をしたいです。

僕は、代々イノベーター家系ですから、先代と同じようなことをやっていれば何もやっていないということです。いかにその時代の美意識と価値観に応じて進化させるかというところがうちの家訓のようなもので、伝統こそ最新でないとだめだと思っています。

銀座ではそんな一番新しいものを発信していきたいですね。スローな和のもの、ひと手間ふた間かけたものをお召しになるということが実は格好いいと思います。所帯じみたきものでもないし、お姫様のようなきものでもない、都会的でエレガントでセクシーでいい女を表現できるようなきものを発信していかなければならないでしょう。もちろん、何から何まで新しければいいというのではなく、そのさじ加減も〝伝統〟の難しいところで、大人のお召し物であり、モードとして提案することが大事です。

――2月に閉めた六本木の店での経験は。

六本木に店を出したのは7年前です。僕らは京都の小さな染め屋ですから、そんなところが六本木ヒルズに店を出すというのはかなり挑戦的なことでした。六本木ヒルズもラグジュアリーなものは揃えましたが、日本のものはないかということでした。当時はマルキューがありましたが、路線が違うし、デザイナーブランドも新しいものが少ない、文化しかないと森ビルさんに言われて、伝統ではあるけれど古いままではない新しいもの、ということで要請を受けました。

新しいきものを東京コレクションなどに参加するなど発信していましたが、それまで百貨店や専門店での展示会販売だけでしたから、一般の人が日常的に買う場所がなかったんですね。思い切った出店でしたが、六本木のランドマークに出られるチャンスでもあるということで足を踏み出したんです。場所はテレビ朝日の1階部分でした。そこは他のテナントはかなり入れ替わったんですが、うちは贔屓ファンを広げてきました。7年間でこの蓄積は大きいと思います。銀座はこの経験と蓄積、顧客とのつながりを引き継ぎます。

――銀座という場所について。

圧倒的に来街する数が多いということですね。歌舞伎座があったり、ギンザ・シックスには観世能楽堂が入ります。歴史と伝統芸能、文化の集積、発信の地になっていくと思います。和に興味を持つ人たちが集まるのではないでしょうか。店ではきものだけでなく、インテリアや内装にも実験的な試みを加えていますし、店頭で多様な仕掛けも考えています。ホテルとかレストランの内装など、きもの以外の仕事も増えつつあります。これらも単にきものの生地を使うということでは強度が足りません。絹をポリエステルに変えるなどして、工業的な物作りをしながら工業製品としての規格を併せ持つことで伝統工芸が進化するのではないかと思います。ギンザ・シックスの店を足がかりに、さらに広げていきたいと思っています。

■三才　手描き友禅染色加工業で創業し、呉服、和装品の企画販売、インテリア用品販売を手掛ける。1933年斉藤才三郎氏が創業し、61年三才染工芸を設立した。88年に現社名となる。2代目の三才氏を含む3代ともに現代のきものに挑戦してきた。09年には東京・六本木ヒルズに初めての小売直営店「絹磨×JOTARO SAITO」（ケンマバイジョウタロウサイトウ）をオープンした。現代に着るおしゃれな衣服としてのきものを追求し、西陣織など和の伝統を生かしたホテルの内装などインテリア関係にも取り組んでいる。

2月に閉店した六本木ヒルズの店。銀座店はさらに進化させる

――今後の考えは。

きもののマーケットはやはり、少しずつ右肩下がりは続くと思います。きもの業界はニッチにはなっていますが、私たちはその中でのニッチなので、新しいクリエーションを続け、最新の伝統を提案していけるだけのベースは作りたいですね。基本は物作りの会社ですから、その時代の価値観と美意識にあったものの提案を強めていきたいと思っています。従来のきものを愛用されている方に向けたものではないですね。興味はあるけれど着たことはない、今のファッションに合う、センスのいいものが着たいと思っている潜在需要はまだあると見ています。将来は海外へ向けた仕事も広がればと考えています。

――三才は京都で長くやられている。

昭和8年に創業し、すでに84年が経ちました。染め屋としてやってきましたが、京都では古い方です。私をアバンギャルドなことをやる新参者と思われる方もいるんですが、当社は初代から先代、私と3代続けて新しいことに挑んできたので、京都のこの業界では（三才は）そういうものだと知られていますから不思議がられることはないんです。伝統を守ってやんちゃしている。そんな存在かも知れません。当社は染めは京友禅の技術、伝統を受け継ぎながら、新しい技術、技法を取り入れています。例えば、職人というのは桜であれば桜色で写真のように描く腕はいいんですが、桜色の桜を描いた振模様のきものは田舎くさいんです。桜色よりもグレーやブルーで描くほうがあか抜けてモダンです。そこが職人とデザイナーの違いでしょうね。もちろん僕らが職人であることは変わっていません。

――現在の販路は。

直営店での販売を含む直販（展示会販売）と以前からの京都の問屋のルートです。そのほかに、マテリアルやインテリア関係の売り上げになります。ECはやっていませんが、自社サイトを整備して3日から本格的にスタートします。六本木ヒルズに来店される方の9割以上がサイトを見て来られます。ファッションショーをライブで見ていただきたいですが、サイトを充実させて情報発信を強め、ECも広げていきたいと思っています。ただ、きものという商品の特性上、パーソナルなお付き合いになります。タンスの中まで意識しながらお勧めしていきます。単なる売り買いではなく、知識や会話をはじめ、しっかりした接客をしないとファンを広げることができません。

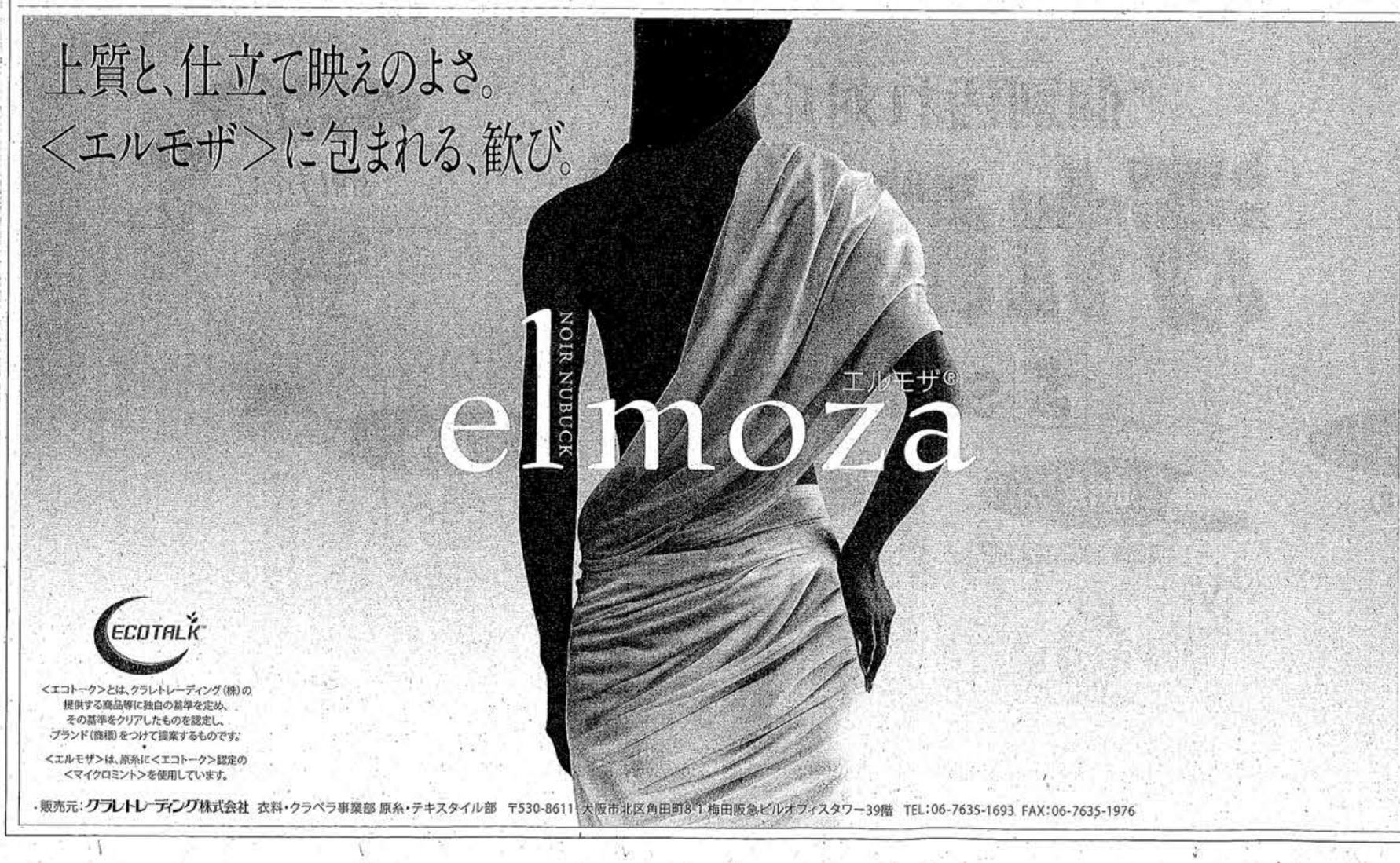
――今後の考えは。

うなことはリアリティーがないわけですね。やはりモードっぽいきものを着て、手にはバッグを持ってストールを巻いて街に出る方がリアリティーがあるのではないか。本格派のきものほど着ていく場所が少ないですし、生活感から縁遠いんですね。

――男性客は。

うちの店で特徴的なのは全体のお客様の4割が男性です。普通の呉服屋は1割未満です。男性の方がきものを着る（シーンの）幅が広くカジュアルに着られます。女性の場合、きちっとボディーを包み込むような着方でないと様にならないですが、逆に男性はざっくと着られて、いなせな感じなので、着るのも簡単だし楽なんですね。洋服の場合、（フォーマルな場に行く時）ルールがありますが、きものであれば、どこでも通ります。僕はデニムとかジャージーのきものを作っていますが、それを着て結婚式にも出られるんですね。

上質と、仕立て映えのよさ。
＜エルモザ＞に包まれる、歓び。



kuraray

流行を先取りしながら、
次々に魅惑のラインアップ。
クラレの＜エルモザ＞は、
環境にも配慮した
ヌバック調素材です。

しなやかで繊細な風合いを、ヌバック調素材に醸し出せないものか・・・クラレが着目したのは、独自開発の水溶性樹脂＜エクセパール＞でした。この素材こそ、国産技術による初の合成繊維「ビニロン」を開発以来、その原料樹脂「ポバール」、ガスバリア性樹脂＜エバール＞へと受け継いできたクラレの酢酸ビニル関連技術の結晶です。＜エルモザ＞は、この＜エクセパール＞を使用した複合溶融紡糸繊維＜マイクロミント＞を採用。有機溶剤による処理を不要とした、環境配慮型のヌバック調素材です。その流れるようなドレープ性、鮮やかな発色性、ソフトな膨らみ。そして多彩なラインアップで、世界中のドレッサーを魅了し続けています。

ECOTALK
＜エコトーク＞とは、クラレトレーディング（株）の提供する商品等に独自の基準を定め、その基準をクリアしたものを認定し、ブランド（商標）をつけて提案するものです。
＜エルモザ＞は、原糸に＜エコトーク＞認定の＜マイクロミント＞を使用しています。

販売元：クラレトレーディング株式会社　衣料・クラベラ事業部 原糸・テキスタイル部　〒530-8611 大阪市北区角田町8-1 梅田阪急ビルオフィスタワー39階　TEL:06-7635-1693　FAX:06-7635-1976

記者メモ

昨年はレディー・ガガにきものをプレゼントしたことも話題になった。革新的なきものの創作に力を注いできた斉藤さんだが、今回のギンザ・シックスへの出店にはこれまで以上に力が入っている。

品揃え、店装、併設するカフェなど陣身を込めた店になりそうだ。中でもカフェで販売するアイスキャンディーが見ものだ。斉藤さんが子供の頃、親に連れられて銀閣寺そばのアイスキャンディー屋でよく食べた思い出のスイーツで、今回親子で一致して新店で出すことにしたそうだ。京都の工房の1階をスイーツ工場に改装して作る。500円程度の値段になるということなので、開店したらぜひ味わってみたい。

学生時代にはラグビーをやっていた。27年前に京都にクラブチームを立ち上げ、その後もチームにはかかわっており、チームの部長を今でも務めている。昨年、地元のリーグで久しぶりに優勝したとのことで、これも新店成功への弾みにしたいところだ。

（武田学）